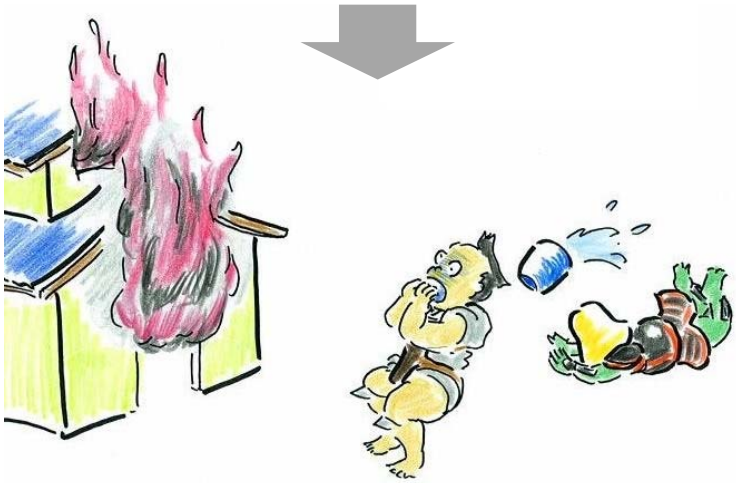
支援くんの火災予防奮闘記

これまでのあらすじ

物語を読む前にまずご覧ください。

物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。

家来の中間（ちゅうげん） ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年５歳になる市民家の長女 援(えん)ちゃん には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

点得(てんとく)幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦労の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.40

久々にお城の殿様へのご挨拶を終えた拙者達は、晩春の兼六園を石川橋から成巽閣へと向かっておりもうした。

その途中、かの梅園の脇道に差し掛かり、見るともなく梅林の方を見ますと、数多（あまた）の黒々とした枝に、紅や白の、また黄の小さな花びらが、ポツン、ポツン

と咲いておるのが認められましてな、拙者はその小さく可憐な花びらに誘われるように梅園へと迷い込んだのですじゃ。

　薄紅色を香りに変えたかと思う、えも言われぬ良き匂いをしばし楽しんだ拙者が

　「良い香りじゃのぉ」と感嘆の声をあげると

　「ええ香りですなぁ旦那様。」と傍らのご助も同じように声を上げましたのじゃ。

　花を見ながら、ご助のその声を聞いた拙者が

　「ほほぉ、いよいよご助も梅を愛でる心持ちがわかるようになったかの？」と尋ねますと、ご助が

　「あたりまえでさ、あっしも旦那様とご一緒してからなごぉ（永）ございますからなぁ」と答えるので

　「うむ。善き哉、善き哉。」と、傍らのご助を見やり

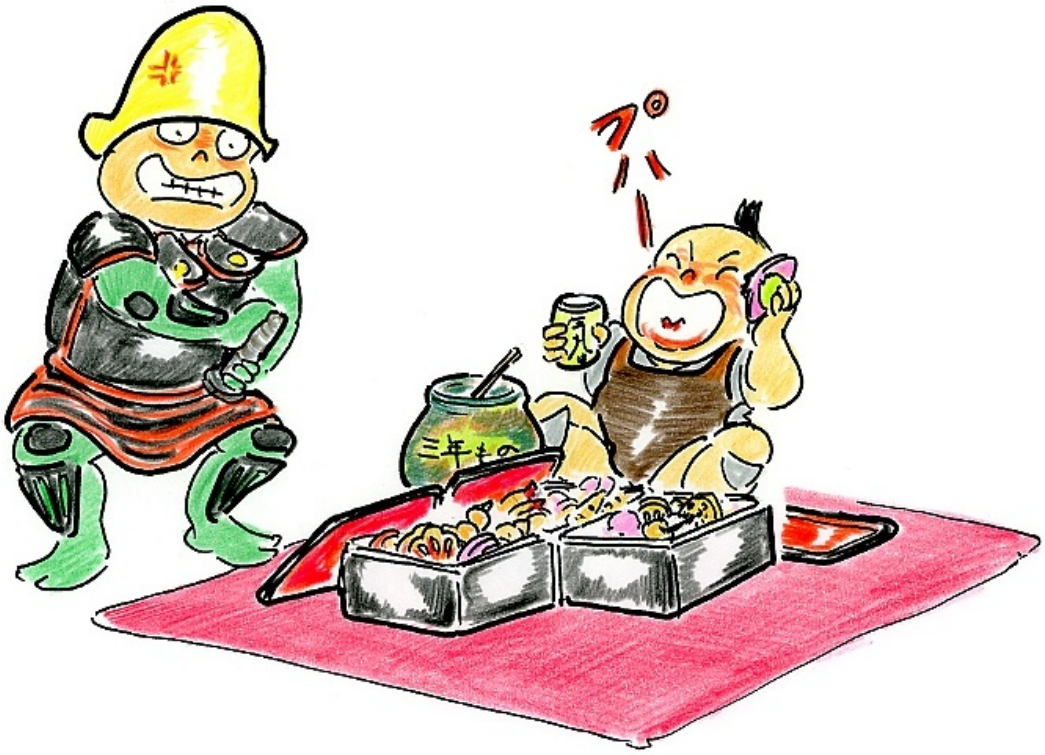
　「褒めてつかわ・・・」と言いかけ、拙者は言葉を失ったのじゃった。

そこで見たのは、梅園の一角に敷いた緋毛氈（ひもうせん）に座り、さきほど殿様から拝領したばかりの輪島塗の重箱を開き、長生殿に次いで拙者が愛して止まぬ桜餅を頬張るご助の姿があったのじゃった。

「な、何をしておる？」とやっとのことで問いただす拙者には目もくれず

「だ、旦那様、やっぱり３年物はいい香りですなぁ」と、３年物と書かれた酒瓶の蓋を開け、柄杓で何杯目かの梅酒を湯呑に注ぐと　グイッ、グイッ、グイと一気に飲み干し

「ぷっはぁー、こ、こたえられやせんぜ！」とホザキおったのじゃ。



「お、おのれは、何をしておるのじゃと言っておる！返答しだいでは成敗してくれん！」と拙者が懐の懐剣「小鉄」に手を掛けると

「お？お？なんでぇ旦那様？あっしをお手打ちになされるおつもりで？面白れぇ、やってもらおうじゃありやせんか。さあ、矢でも鉄砲でも持って来やがれってんだ！」と居直り、

「あっしも中間のはしくれだ。浅野のお殿様のように桜の下じゃねえのが心残りじゃが、中間の散り際をよっくご覧下せえ。」と続けると、身に着けた胴丸を脱ごうと組紐を解こうとしたのじゃろうが、酔いすぎて思うようにならない様子じゃった。

しまいには、

「ええいしゃらくせぃ。」と叫ぶと、セーターを脱ぐように単衣を脱ぎ去り、赤い褌一枚の恥ずかしい姿をことさらにひけらかすと

「今日を限りのこの命、意地のためなら惜しいとは思わざりしが、今一つの心残りといえば末期の一服よ。旦那様。武士の情け、どうか腹を召す前の一服をお許し下され。」と続け、褌の中に隠しておったのであろうか、クチャクチャのタバコを咥え、同じく隠し持っていたライターで火を着けると、プハーッと大きく吸い込んだのじゃった。

この時代掛かった長いセリフに加え、酒に酔っておったご助は、深く吸い込んだタバコの煙のせいで急激に意識がもうろうとし始め、「く、くそっ・・・何で？」と、必死に大脳皮質のしびれと格闘しておったのじゃが、程なく「グウグウ」といびきをかきながら寝入ってしまったのじゃった。

「ここまで馬鹿だったとは・・・凄まじいのぉ。」と呆れながらご助が食い散らかした花見の後片付けを始めた拙者は、松林の中を歩くうちに一際大きな松の木の木陰に蕨の群生を見つけたのじゃった。

「おや、こんなところに蕨が・・・おや、こっちにはノブキまで。４月じゃのぉ。どれ、食い意地の張ったご助の為に少し頂いて行くかの。馬鹿な奴じゃがそこがまた良いところじゃからな。」と独り言を言いながら拙者は蕨とノブキを摘み始めたのじゃった。

山菜採りの時に絶対に守らなければならない注意事項と言うのがありますな。何といっても遭難しないことに加え、熊などの野生動物と出くわさないようにすることですわな。

しかし、この時の拙者は蕨とノブキ採りに夢中になり、あろうことか兼六園に聳える広大な栄螺山の山中で道を見失ってしまったのじゃ。

拙者が遭難？

ご助の馬鹿に何も告げずに栄螺山に立ち入ったのは拙者一生の不覚・・・今となっては拙者の頼みは馬鹿のご助が気付いてくれることだけ、じゃが酔っぱ

らってタバコの煙で気を失っておるご助に期待することは、山で出くわした熊が帰り道を教えてくれることを期待することに近いことじゃろう・・・が、

　ご助への淡い期待を寄せ、あらん限の声で　「ご助ぇー、助けてくれぇー」と叫んではみたが、やはりこだま以外に返事する者もなく、あたりは夜の帳(とばり)と深い静寂に包まれていったのじゃった。

「ふぅうう、無駄か」と嘆息を漏らすと、拙者は傍らの切り株にへたりこんだのじゃ。

山菜採りで遭難した時の鉄則その２　迷ったら不用意に動かず、体力を温存し救助を待つ・・・じゃったな。
と暫らく切り株に腰掛け休んでいると、拙者の背後の藪が　『ガサガサガサ･･･』とざわつき始めたのじゃった。

「ご助か！」と、立ち上がり喜色満面の笑みをたたえ、音のする方を見た拙者の顔は、しかし、暗い藪の中から『ぬうぅ』と突き出した大きな黒い影によって、そして、こちらに向かって来る大きな黒い影の胸とおぼしきあたりにボンヤリと白い月形を見て凍り付いたのじゃった。

「つ、つ、つ、月の輪熊じゃあーっ」と全速力で逃げる拙者を、背後の熊も全速力で追いかけてきた。

「助けてくれぇー・・・」と叫びながら逃げる拙者を熊もまた「ま、待って下せぇー」と追いかけてくるのじゃった。

「ま、待てるかぁ！・・・え？何じゃ？待って下せぇーと・・・熊が言うか？」と走るのを止めた途端、拙者の背に熊の奴が飛び掛かってきたのじゃ。

「ぎょえええええ！」と叫ぶ拙者より飛び掛かって来た熊の「ぎょえええええ！」の声が大きく栄螺山の麓に広がり、拙者は気を失ったのじゃった。

如何ばかりのときが過ぎたのじゃろうか、拙者が正気を取り戻すと、足元には気を失ったままの熊が同じように寝転んでおった。

「ひっ」と小さな悲鳴を上げ立ち上がろうとした拙者は、熊の口の中にご助の見慣れた馬鹿面を見つけたのじゃ。

「ややや っ、ご、ご助！ご助が熊に食われておる!!　助けねば、こら熊公、ご助を出せ！吐き出さぬか！」とご助の危機に熊への恐怖も忘れ、拙者は叫びながら熊の頭を、腹を、背中を叩き、殴り、蹴り上げたのじゃ。

（令和６年４月号につづく）